

第1回「淡路島総合観光戦略策定会議」議事要旨

日時：令和4年8月12日（金） 13：30～16：00

場所：兵庫県洲本総合庁舎5階 多目的ホール

出席者：宗田委員、相野委員、琴井谷委員（代理：谷池氏）、赤穂委員、津田委員、雨堤委員、真木委員、正木委員、井壺委員、田中委員（オンライン）、白川委員、守本委員、山下直委員、勝見委員、江崎委員

議事の要旨

事務局から新観光戦略（仮称）策定に向けて、現行戦略の取組と課題及び新観光戦略（仮称）の取組の方向性を説明し、座長、委員によるテーマごとの意見交換を実施

テーマ1：歴史・文化・産業・食などの磨き上げ

歴史について

【委員】

- ・歴史、くにうみ神話があることは理解しているが、具体的には何もない。
具体的なものがないからストーリーが弱い。
伊弉諾神宮など具体的なシンボルを使ってPRすべきでは。
歴史や文化は若い人に対して、魅力がないため話だけでは伝わらないが、伊弉諾神宮など具体的なものを目の前にして説明するとよく伝わる。
- ・今回の戦略のターゲットは若い人なのか、シニアなのか、ピンポイントでターゲットを決めるのか。それとも、いろいろなターゲットを設定してそこを攻める方法を考えるのか。

【座長】

- ・いまの若い人は学校で古事記を教えられていないため、くにうみ神話を知らないし、話をしても伝わらない。そもそも若い人はジオパークや世界遺産なども含めて歴史に興味がなく、テーマパークに人が集まっている。
- ・どこかのターゲットにしぼって演出していかないと、伝わらない素材である。そもそもあらゆるターゲットに伝わる商品はない。

地場産業について

【委員】

- ・南あわじ市においては、新しいホテルの建設予定があり、そういった施設で瓦や水産品等、市内の地場産業を買っていただけるようにしたい。

【委員】

- ・淡路市においては、3年ほど前から島外資本による進出、開発が進んでいる。進出当初より地場産業・農水産業とのかかわりがなく、うまくいかないとの観点から、地場産業品の納入が進んできており、好影響を受けている。
- ・進出により西浦線（県道）などの交通渋滞問題の発生や、観光関連以外の方から反発があることは課題と考えているが、平準化（標準化）を目指すことが消費・生産量を上げるキーポイントだと思われる。
- ・淡路市内では一昨年は60数社、昨年は50数社が新規開業している、逆に商工会脱退が一昨年30数社、昨年は20数社あった。新規加入の約半分程度が後継者不足などによる廃業等を理由とした脱退があるが、これは一定の自然淘汰（新陳代謝）と考えられる。現在も月に5件程度、神戸・大阪等からの問い合わせがある。
- ・淡路市独自に新規開業にあたって100万円の制度融資があること、サポートセンターを設置していることもあり、一定の効果が上がっていると思われる。
- ・新規事業者からは新たなビジネスチャンスと受け止められているようで、海の見える場所の土地需要が高まっている。

【座長】

- ・新陳代謝が活発なのは、パソナの効果が大きい。
- ・国立公園としてのきれいな景観等を守るため、乱開発の歯止めは重要な項目である。
- ・淡路市の成功を洲本・南あわじ市にどう広めるかを考えることが重要である。

【委員】

- ・洲本市は新規開業より廃業が多く、この30年で約4割程度減少している。
- ・戦略としてシニア世代が重要では。個人資産の約半分がシニア世代に集まっている。若い方が遊びにきてくれるのは最近の淡路島の強みであるが、シニア世代が少し弱いと感じるため、シニア世代への消費喚起策が必要。宿泊施設・観光施設などシニア世代が消費いただけるような戦略を策定することが重要。シニア世代は客単価も高く、これからシニアそのものが増えてくる。
- ・淡路のウイークポイントは連泊がない。コンテンツが少ない。
- ・シニアにむけた交通施策（Maas）やコンテンツも必要。

【座長】

- ・ダイヤモンドプリンセスはほとんどシニア世代が乗船している。車椅子でも移動出来る海外旅行として日本人、中国人のシニア世代をターゲットにしている。
- ・神戸港に入港するクルーズ船からの誘客戦略も必要かもしれない。
- ・淡路島北部の若い世代、中・南部のシニアなどすみわけができると面白い。
四国では、お遍路さんを活用して、遠方に住んでいる家族が集まって2泊3日程度で里帰りをする旅行モデルなどがある。シニアと孫との思い出づくりの旅に淡路島は向いている。
- ・2040年頃に大量死時代が来る（団塊世代の寿命）。今回はその時期までをつなぐ計画策定につき、シニア世代にむけて戦略を考えるのは重要と思われる。

食について

【委員】

- ・淡路島には良い食材もあるが、良いものばかりではない。良いものは京都や都会に流出している。
- ・赤うになどは高級なため、一般向けには、B級グルメとしてシラス丼や牛丼などが人気である。良いものは高価なため、例えばシニア層をターゲットすることはできるが、これでは一部のターゲット・食材だけになってしまう。淡路島は幅広い世代にむけて食材を提供できる島なので、ターゲットを広く設定するほうが幅広く飽きのこない継続的な集客ができる。
- ・食がおいしいのはあたりまえで、観光・アクティビティなどがすべてそろってトータルで淡路島の観光は成り立っている。

【委員】

- ・旅の目的は、温泉・宿・食がベスト3であり、コロナ禍でも変わらず、食は大事だと感じている。
- ・淡路島内で食に関する事業としては、ご当地グルメとハイクオリティグルメの2本立てで事業展開をしている。
1つ目のザ・ご当地グルメ（一般大衆向け）はニーズが高いため継続が必要である。
1年間、サクラマス、しらす、サワラ、はも、えびす鯛、3年とらふぐなど四季折々の食材があり、それぞれ海の幸のグルメ開発を行い、発展してきた経緯がある。
2つ目のハイクオリティグルメはわざわざそこに食べに行きたいと思えるもの。
いまはこのハイクオリティグルメを推進している。その中で重要なのは、一つ一つ食材にはストーリーがあり、それを丁寧に紐解く必要がある。ただ紐解くだけでは意味がなく、それを語れる伝道師がいない。伝える人がいないと全く伝達しない。ストーリー

を表現するだけでなく、その伝える伝道師の育成とあわせて実施することが重要と考える。

- ・定期的なグルメのブラッシュアップが必要。マンネリ化してくると料理人もモチベーション及びスキルが下がる。
- ・良い食材が島外にでていくのは、島内では高いものが売れないため。これを食い止めるためにも淡路島内のハイクオリティグルメの推進は、ご当地グルメ開発とあわせて重要と考え取り組んでいる。

【座長】

- ・食には物語・演出が必要であり、御食国だけでは説得力がなく勝負できない。
- ・イオンなどでは流通革命がおき、中央市場を通らないルートで仕入れが進んでいる。ただし小ロット・高品質な生産者も存在しているので、これを島内に流通させるようなローカルフードのネットワーク構築が重要だと考える。
- ・古い町並みや淡路島の景観をつかって料理人を誘致するような取組も有効と考える。場づくり・景色・ロケーション・味などを磨き上げていけば食のコンテンツとなる。
- ・くにうみ神話も「子宝が授かる」など物語を新しく作ることも必要では。

テーマ2：首都圏・インバウンドなど遠隔地からの誘客

テーマ3：島外からの淡路島への移動及び島内における移動手段

【委員】

- ・人口減少が進んでおり、関西圏のマーケットが縮小しているため、首都圏・インバウンドの誘客が必要である。
- ・淡路島観光協会では、4年前から首都圏誘客に取り組んでいるが、なかなか成果があがっていない。首都圏向けに徳島空港の有効活用が必要と考える（安い・早い）。
- ・広域集客となれば2泊・3泊といったコース設定が必要なため、徳島の大塚美術館を巡ってもらうなど淡路島周辺を巻き込んだ連携ルートの開発が重要である。
- ・観光消費額、GDP を考えると広域からの集客が重要ということは理解できるものの、従来の日帰り客を中心とした事業者も多く、淡路島を支えている部分でもあるので、ここは無視できない。
- ・季節変動は、20年前は冬場が弱かったが、3年とらふぐでかなり回復している。今は6月・12月・2月が弱い。
- ・配膳ロボットを導入している企業も増えている。
- ・パソナの影響かも知れないが、従来より広いエリア（秋田県・広島県等）から求人が来るようになっている。

【座長】

- ・水仙郷が人気なので1月・2月に首都圏にPRできるのでは。
- ・集客のピーク時が減ったとしても、オフ期の底上げをするなど平準化を目指すことが限られた資源（働き手など）を有効活用するためには取り組む必要がある。

【委員】

- ・淡路市に登録されている外国人が約600名おり、そのうち約400名が製造業等に従事されている。
外国人を雇用している事業者向けに日本語教育を勧める機会を予定している。
- ・製造業においては、外国人からの労働者は女性の方が多いため、住宅・職場環境に敏感であり、受入環境をよりよくしていかないと人が集まらない。

【座長】

- ・今以上に観光GDPの割合を引き上げるためには、外国人労働者などの活用も重要である。世界的な潮流としては外国からの移民を市民にしていく動きで増えている。移民に伝統行事等を担ってもらうことも考えられる。

【委員】

- ・淡路島は交通手段が弱い。レンタカーの話も出ているが、道路を整備しないと危険な状態である。自転車道の整備より道路を広げることが必要である。西浦線は大型トラックと自転車が両方走っている。ここが整備されないと、観光につながらないし、新たなモビリティの導入も難しい。道路の周辺はほとんどが山で立ち退き等はほとんどないのでは。山の中の道も整備しないと、リピーターが来ないのでは。
- ・東京の築地に行っても食べられないものがさわらの刺身、タタキは地域ならではの。東京でもはや3年とらふぐは食べられるが、価格が2倍以上する。現地に来て食べようとしないのはアピールが足りないのでは。首都圏にもっとアピールすべき。首都圏から来ないのではなく、知られてない、認知度が低いことが問題である。鳴門の世界遺産登録の動きとあわせて淡路島の認知度を上げることは可能。
- ・徳島空港からは近いが、伊丹や神戸に比較すると航空機代は倍近くするので、あまり活用できないのでは。
- ・サイクリストによっては、淡路SAに車を駐車し、そこから自転車で移動して、そのままUターンして帰る客がおり、高速から降りないため、地域にお金が落ちていないと聞いている。

【座長】

- ・今後、LCC（格安航空会社）の進捗によっては考えられるのでは。

- ・道路の危険箇所等を県民局で調査してほしい。

【委員】

- ・淡路島は本当に道が危ない。西浦線では夕方に大型トラックの通行が非常に多い。最近
は、自転車だけでなくバイクも多いため、観光だけではなく住民にも影響がでてきてい
るので、県・国が道路整備を進めないといけない。

【委員】

- ・サイクリスト用の宿泊施設や休憩施設が整備されているが、経済効果が小さい。

【委員】

- ・サイクリストとの接触事故なども発生しており、一部運行の障害になっていることは否
めない。
- ・鳴門海峡の自転車輸送を行っているが、バス事業者としてはあまり経済効果がない。
- ・マイカーによる観光が増えている状況にあるが、バス事業者はコロナ前との比較で65%
程度の回復に留まっている。
- ・多客期には渋滞が起これバス運行に支障をきたしているケースが多い。

テーマ4 持続可能な観光地地域づくり

【委員】

- ・資料3は取組・課題となっているが、この課題とは。

【事務局】

- ・戦略に対して、今後取り組んでいったほうが良い事項ということ。

【委員】

- ・淡路島の観光産業はどうしていくのか。何を目指すのか。という大前提が議論されないと前にすすまない。例えば、SDGsでいくとこれからの観光において環境の問題は外せないため、この考え方の中で個別課題を整理する必要がある。
- ・食は外せないコンテンツ。生産者と観光事業者それぞれの立場があるが、生産者が高いところで売るのは当たり前前行動である。島内流通に仕向けるインセンティブなども考えられる。
- ・いずれにしても「どこに向かって進むのか」という前提がないと、それに対する施策も変わってくるのではないか。

【座長】

- ・人口減少（高齢化）の中で、経済構造の変革が必要（観光産業の GDP 向上）。
そのためには淡路島の生産量（供給量）にあわせた観光産業の検討を考えていく。もちろん一次産業はしっかり確保していくし、これを活かすことがローカルフード・スローフード・御食国につながるというストーリー（資源の再配分の検討）。
また、島外からの投資・新陳代謝をどう図っていくかで持続可能性につながる。
このストーリーをもとに、各地域行政・商工会・商工会議所・観光協会などとのすり合わせて、戦略を設定していきたい。
従来のような振興ありきではなく、どう再配分していくか。ということが分かる計画にしていきたい。

【委員】

- ・洲本市は観光資源が乏しい。また、駐車場が少ないことから街歩きを推進してきた。
その中で、従来からの観光資源（洲本城・三熊山・大浜海岸・鮎屋の滝、赤れんが倉庫群など）と、新たに開発していきたくみちや今年度、大浜海岸でオープンしたレジャー施設などとの連携に課題が多く、その活用施策を模索中。

【座長】

- ・洲本はカネボウから続く一番歴史の深い街であり、淡路島の唯一の城下町。
都市型観光とこれを活かしたまちづくりの手腕が問われている。
- ・古いものを大事にしながら歩き回る町と車で移動する町の違いについてメリハリをつけて作っていくと良いものになる。

【委員】

- ・淡路島はパソナの進出のおかげで注目が高まってきているが、認知度はまだ低い。
淡路島といえばコレ！淡路島にしかないものはコレ！と言えるものがないのがもどかしい。淡路に住んでいる人が言えるようなものが見いだせると良い。
- ・新しい施設と旧来の施設との連携が大切。
- ・宿泊施設不足が観光 GDP 上昇の足かせになっている。
- ・夢舞台周辺も現在開発中。関西万博を見越して、その会場からどうやって淡路島に誘客するかがカギとなる。

【座長】

- ・安藤忠雄、丹下健三など、なぜ淡路島を選んだか。外から見た選ばれる理由、正当な評価をストーリーとして考えてもよいのでは。

【委員】

- ・島外資本進出のきっかけは、廃校になった小学校の売却から、現在も市有地を数多く公募の上、投資していただく前提で売却しているのが現状である。

【座長】

- ・廃校となった小学校の売却は全国の自治体でも行っているが、大企業を誘致した例はない。大企業が淡路島を選んだ理由は把握している必要がある。

【委員】

- ・島外資本の各事業において利益が出ているかどうか分からない部分がある。事業として成り立っているのか確認する必要がある。

【座長】

- ・こちらでは分からない戦略を持っているのは確か、それを聞いた上でどういった観光戦略にするか考える必要がある。

【委員】

- ・ひょうご新観光戦略も現在策定中であり、その中でめざすべきビジョンは持続可能な観光地域づくりとなっている。
- ・淡路島の状況を見ると、京阪神中心・日帰りが多いが、兵庫県全体と同じ傾向である。
- ・観光消費額をあげ、リピーター率をあげていく。
- ・地域内調達率（地産地消）の指標は淡路島にあっている。
- ・「サステイナブルアイランド淡路島」などひとつ目標があるとわかりやすいのでは。（すでに淡路島の日常で実践しているのでは。これを取り上げていくのも良い。）

【座長】

- ・SDGs は意味が広く、環境だけでない（平和と公正等も SDGs）淡路島の生活の細部、淡路島だからみせられる SDGs を議論しても良い。

【委員】

- ・数値目標は観光消費額を一番に記載すべきでは。

【委員】

- ・持続可能な観光地域づくりのために、JSTSD等のガイドラインに沿った取組が必要ではないか。

【座長】

- ・ UNWTO がトラベル・エンジョイ・リスペクトのキャンペーンを実施している。
淡路島も観光客が淡路島のすぐれた部分を（リスペクト）、持ち帰っていただけるような取組が必要と考える。

【事務局】

- ・ 次回の策定会議にむけて 8 月末を目途に素案を提示し意見を伺う。

次回、第二回策定会議 9月15日 13:30～。

以上